

遠回りしてみたらおおぜいが
が楽しめ、うまくいかない
こともあったけど
いろんな人に役割
が生まれた。でも、
その先が涙で見
えない。それでも
やってみている市民と市
の話。すいません、長くて。

長久手市リニモテラス構想
をめぐる
公民協働の経緯

リニモテラス運営協議会

はじめに

私たちはリモテラス運営協議会です。市が計画したリモテラス公益施設(仮称)について、発足から約1年半。リモテラス構想の計画に盛り込まれた4つのカテゴリーに関連する団体から構成されています。運営協議会のメンバーは、全員がお互いのことをあまりよく知りませんでした。そして、リモテラス公益施設(仮称)について考えることが、こんなに悩ましく大変なことだと、おそらく誰も知りませんでした。よく考えれば、私たちがかわった時間よりずっと長い時間、この計画は話し合われて来たのです。簡単ですが、その経緯を少し振り返っていきましょう。

リモテラス運営協議会を構成する団体等



そもそも 2008年～

リモテラスって? の経緯

平成20年度 (2008)	第5次長久手市総合計画策定、3つの主要プロジェクトのひとつにリモテラス長久手古戦場駅周辺に対するリモテラス構想が掲げられ、まちの新たな顔として「住民の日常の暮らしを支え、訪れる人をもてなす空間を創出する」拠点として「リモテラス」を整備することが決まる。
平成21年度 (2009)	長久手市都市計画マスタープラン策定 リモテラス長久手古戦場駅周辺が「新たな都市核(シンボル・コア)」として位置づけられる。 <small>〈その他、関連する前提条件〉</small> <small>平成20年度策定 リモテラス沿線地域づくり構想</small> <small>平成24年度策定 長久手中央地区まちづくり基本構想</small> <small>平成26年度策定 第2次長久手市観光交流基本計画</small> <small>平成26年度策定 古戦場公園再整備基本構想</small> <small>名古屋都市計画による用途地域 第1種住居地域 建ぺい率60%</small> <small>容積率200%</small> <small>長久手中央地区計画による土地利用方針 B-2地区</small> <small>長久手市美しいまちづくり条例</small>
平成27年度 (2015)	リモテラス公益施設(仮称)で想定されている4つのテーマの現状と課題を調査し、位置づけやコンセプトの設定に資する意見を広く市民から収集するためヒアリングやアンケートを実施。その内容と本計画策定委員会での意見を整理し「リモテラス公益施設(仮称)整備基本計画」策定。施設コンセプト「新たなつながりをデザインする場」
平成29年度 (2017)	「100プロジェクト」実施。市の呼びかけに応えた市民が中心となって無数のプロジェクトを実施することで設計と管理運営の検討を行う。
平成30年度 (2018)	リモテラス運営協議会が発足し、市民の意見を取り入れた平面プランを作成。リモテラス構想実現のため、長久手中央2号公園等を活用しながら「公民連携」を具体化した運営管理方法も検討。

リモテラス
整備基本計画
策定委員会

リモテラス
運営協議会

ここまでの、ざっと振り返っても本当に長い時間をかけて取り組んできた計画だとおわかりいただけるだろうか。長久手が活気のあるまちであるように、ずっと長い間ここに暮らす人たちは知恵を絞ってきた。ついこの間まではカエルがわんさか鳴いていたリモテラス長久手古戦場駅前も、区画整理が進み、今ではバスのロータリーや中央2号公園、緑道が整備され、平成28(2016)年大型商業施設イオンモール長久手が開業。ハード面の整備が進められていく中で、「まちの新たな顔」としての役割や機能などソフト面もあわせて

リモテラス公益施設(仮称)の検討が進む。市が計画すると、設計、建設の過程や管理運営の方法に市民が参加する機会は少ないが、計画段階や管理運営の方法を具体的に市民と一緒に考えようという取り組みを続けている。リモテラスの整備は国庫補助事業の対象となっていて建設費用の4割は補助金で賄われるが、税金が使われる。だからこそ、本当に市民にとって必要なのか、話し合いが続く。

(平成30(2018)年度策定「第6次総合計画」政策「観光交流まちづくりの推進」でリモテラスの整備がうたわれている。)

平成31年度 (2019)	リモテラス運営協議会にて実際の運営管理を想定しながら平面プランのブラッシュアップを実施し、年度内に実施設計完成予定。
令和2年度 (2020)	建設開始。リモテラス運営協議会はリモテラス構想実現のため長久手中央2号公園等を利用しながら、「公民連携」を具体化した運営管理方法を検討予定。

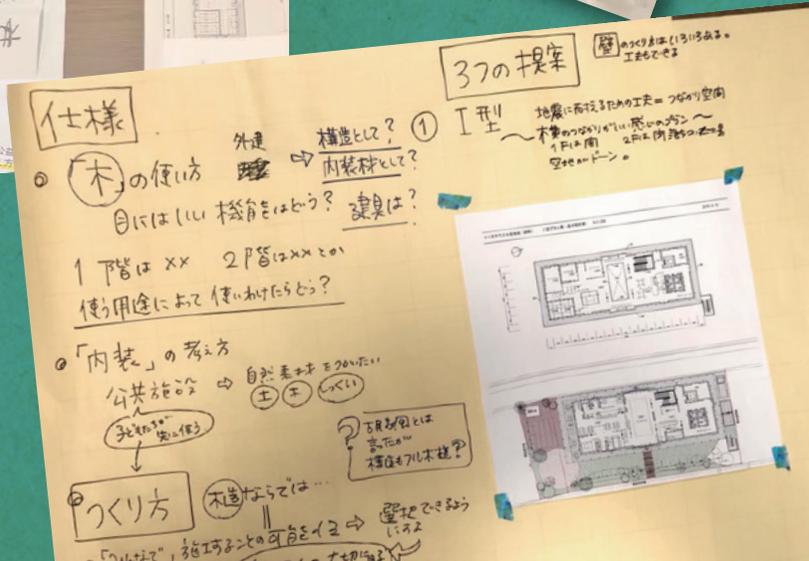
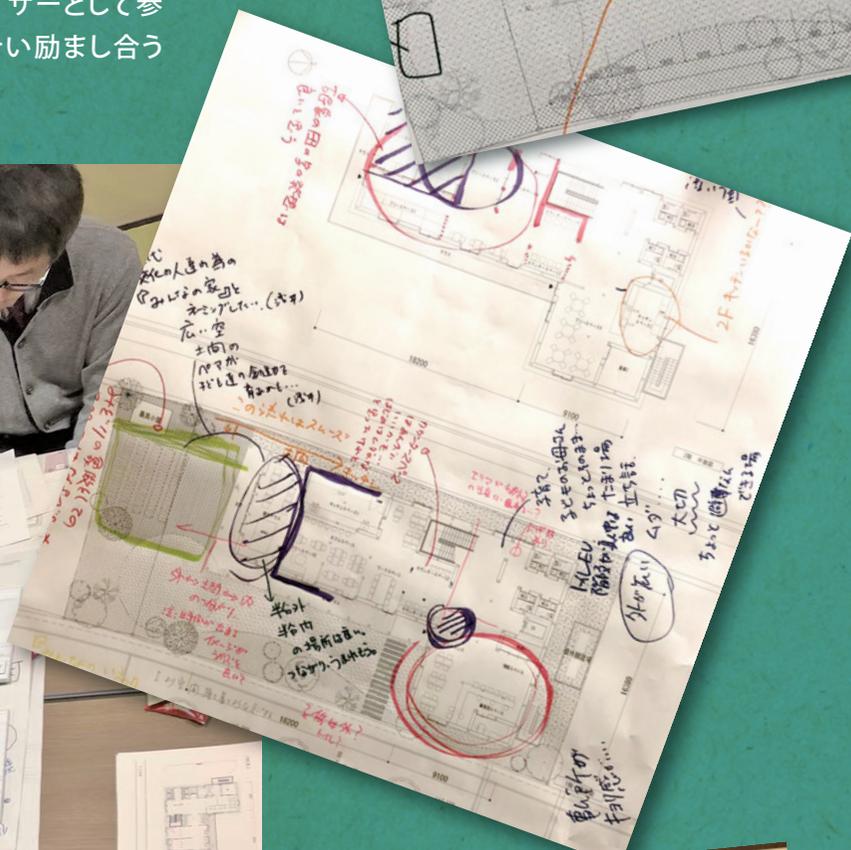
2018年 4月~5月

実行委員会発足！ でも、それでどうするの。

行政スケジュールに従って「隣人まつり」を実行するための委員会が招集。実質的にこの実行委員会が、やがてリノテラス運営協議会となる。東畑建築設計事務所の久保さんとライフワークの内海さん、市の委託を受けてボランティア発掘を実施していた寺島さんがアドバイザーとして参加。行政と設計者とアドバイザーと実行委員会、混沌としつつも探り合いゆずり合い励まし合う日々が始まった。



何度も繰り返した平面プランの検討。長い道のりだけに、参加メンバーも入れ替わるから、そのたびに振り返り共有することにも時間がかかった。一昨年にはこんな内容で、昨年はこうでしたよ、ね？お互いの主張も静かにぶつかっているようないないような、探り合っているような、なんとも重い空気だった気がする。



広中日記① 実行委員会のはじまり

2018年4月、市民公募で文化の家の館長になって間もなく、たつせがある課の布川氏から一本の電話がありました。

文化の家も「リノテラスイベント実行委員会」のメンバーになって、イベントに協力して欲しい。そのイベントは「リノテラス隣人まつり」ーリノテラス公益施設建設を市民に周知し、意見を集めるために6月~12月まで毎月1回行なうと説明されました。

「リノテラス」のことはよく知りませんでしたが、「隣人まつり」には関心がありました。「隣人まつり」とは1999年パリで始まった催しで、あるアパートで孤独死した老人が2ヶ月間発見されなかったことをきっかけとして、同じアパートの住人同士が知り合うために年に1回、5月の第4木曜日の夜に手料理や飲み物を持ち寄って交流しようというイベント。世界各地に広がって日本でも10年くらい前から神戸や東京で開催されています。ところが担当者はそんなことは全く知らず、イベントに名前を使っただけと分かりガッカリでしたが、行政のイベントに文化の家として協力するのは当然と思って引き受けました。

イベント実行委員会には、リノテラスを使って活動を展開する予定の4つの分野「観光交流」「多文化共生」「大学連携」「子育て支援」に関わる団体と、前年度の計画主体だった「100プロジェクト」にかかわった市民、そして「文化の家」館長(私)が集められていて、私は市民館長の市民の部分でかかわってほしいということでした。私は他の皆さんと違ってリノテラスにかかわったこともなく、10年以上前から計画が変遷してきた経緯をほとんど知りませんでしたが、国、県の補助金をもらって整備する事業が予定より遅れているので、きちんと進めたい行政の主体性は強く感じました。それに比べて実行委員会に集められた関係する団体や市民は、私も含めて受け身、まだ主体にはなっていない気がしました。



6月16日 隣人まつり1。初めて実施した。緊張とドタバタと。



8月26日 隣人まつり3。夏祭り 楽しかったなあ、盆踊り。この場所の「可能性」を感じた。



運営協議会に衣替え。

そして、「隣人まつり」

がはじまる。

運営協議会に衣替えしたけれど、何が目的だったんだっけ？事務局は？みんなへの連絡は？隣人まつりは毎月やるって？え？なんで？そりゃ、多くの市民にリノテラスのことを知ってもらうためだよ。そして、仲間を募っていくんだ。で、で？だから、そんで聞くんた。何を？「リノテラスは必要だと思いますか？」って…。ちょっとまってよ、あのさ、必要だから計画したんじゃないのか？いったい何年かけて、どれだけの多くの人話し合ってきたんだ、今さらなんでイベントなんだよ(怒)…。てか、もう時間ないし。とにかく、キックオフ。そんな、無茶な…。

7月22日 隣人まつり2。リノテラス公益施設(仮称)建設予定地の横には、長久手中央2号公園が隣接している。この公園でも、「つながる」仕掛けはたくさん企画できそうだ…ということで、健康をテーマにみんなでトライ! & モーニングコーヒー。ひと汗かいた後は会話も弾む。



それでも6月16日「第1回隣人まつりキックオフパーティ」は行なわれ、市民によるリノテラスイベントは動き出しました。驚いたことにその直後の実行委員会で、行政からリノテラスの建設に必要な意見を集約するイベントだけでなく、運営についても主体になって考えてほしい。だから「運営協議会」を作らしようという提案がありました。あれよあれよという間に僅か3ヶ月で「リノテラスイベント実行委員会」は「リノテラス運営協議会」に衣替えをしました。

私たちは、行政主導で始まった取組みを何とかして市民主体のプロジェクトに移行させたいという行政のスピード感についていくのがやっとでした。市長は「時間はかかるが市民主体で進めるように」と言います。「市民主体」は同じでもやっていることは全然違います。

しかしその時は、めまぐるしく変化する状況の中で、リノテラスの建設・運営を「市民主体で考える」とは、どういうことかをじっくり考える時間も余裕もありませんでした。この時点で主体になって考えていたのは、私たちでなく実は外部アドバイザー(=コンサル)。受け身の私たちを支えてくれたのもコンサルでした。

広中日記②
市民主体への難しさ

私たちは、コンサルと市との契約について全く関与していないのでなぜ委託したのか詳しいことは知りませんが、最初から毎回会議に委託を受けたコンサルが外部アドバイザーとして参加していました。彼らがイベントや各種団体とのヒアリングで集めてきた意見を、私たちと毎回の会議で共有しながら、私たちの意見もそこに加えて情報を蓄積していきました。建設に関してはそういった情報をもとに設計士が形にしていき、運営に関してはコンサルが収集した各地の事例を参考にして運営協議会で検討しました。

市民でつくる運営協議会のメンバーはすべてボランティアで、もちろん無給です。本業があるので費やせる時間には限りがありますし、また専門家ではありませんから専門性を求められても困ります。そういった状況で、何から何まで自分たちでやりきることは不可能だと見越して、市民をサポートするコンサルが必要だから委託したのだと思います。それはスタート時点ではありがたい存在でした。しかし彼らがいる限り「建設や運営を考える主体」になることは難しく、サポートがかえって自立を阻む皮肉な結果を生むことになり、運営協議会という新しい服に着替えても、相変わらず受け身の体質は簡単には変わりませんでした。



9月29日 隣人まつり4。あいにくの雨。のろしは断念。でも多種多様な人があつまって愉快。



10月27日隣人まつり5。文化の家の創造スタッフとの企画コラボ。日常の中のアート。



...よね?

2018年 9月～11月

おおぜいが楽しめている...

行政スケジュールというのはなかなか厳しい。やると思ったら、基本やる。さらに、連携も協働もあわせてやってみてはどうかと提案される。そりゃ、いいことなんだろうけど。運営協議会は組織化したものの、正直「頼まれたから感」が強く、一体感もなければ、意思もまだない。イベントをやるためだけじゃないはずよね。いや、イベントに協議会メンバーが全員揃うことすら難しい。悶々。市長、議会、行政、今まで話したことがない皆さんからも、とにかくあっちこっちから声が聞こえてきた。でも、あれ?肝心の市民の声って聞こえてくる? この場所って市内の人、少ないよね。市の都市公園だって知っている人いるのかな。休日の昼間、なかなか人、いないね。よく考えたら、ここに、賑わいをつくるって、難しくない?しかもリノテラス基本構想にどっかりのってる「新しいつながりをデザインする」って。ほんとにできるの?えっと、これじゃ、「とにかく建物、できました!」になっちゃう。だってもう、仮プラン、あるのよね...



11月25日 隣人まつり6。防災訓練を合わせてキャンプ学習。火の起こし方をならったり、寝袋体験したり。大人はテントでまったり(笑)



9月の議会ではリノテラス運営協議会が立ち上がったことや隣人まつりを定期的に行いながら市民に周知していくことが報告され、さらに9月末には設計の仮プランが市民にお披露目されました。仮プランは、活動する団体や市民の希望を一杯詰め込んだため、狭い敷地いっぱい大きな総二階の建物が配置されていました。最低でも80人くらいが一堂に集まれるような大きな空間が必要という希望に沿うために内装は木造でも構造には一部鉄筋コンクリートが使われていました。

仮プランを見た市長からは「本当に市民の意見を聞いてこうなったのか? 町で出会う市民に聞いても、ほとんどの人はまだリノテラスを知らない。今のままでは判を押せない。市民が本当に必要なものなら建ててもいいが、コンクリートの無機質な箱物をつくる時代ではない。自分たちの手でやれないか考えて欲しい。時間がかかってもいいから市民を巻き込んでとことん話し合ってください。くれぐれも建ったら終わりにならないようにしてほしい。」と言われました。

議会に既に説明した内容に、市長が疑問を投げかけたというねじれた状態が生じた訳ですが、市長から指摘されたことは、確かにその通りでした。毎月の隣人まつりに参加する人がすべてリノテラスを本当に必要とってくれる人かと言えばそうではありません。参加者と理解者は別もので、どれだけ市民に私たちの思いを伝えてきたかが問われていると思いました。「リノテラスは新たなつながりをデザインする場所」...平成28年4月に策定したリノテラス公益施設(仮称)整備基本計画で掲げられた施設コンセ

広中日記③

市長のオーダー

プトを使って説明してきたけれど、そこに思いは込められていたかと考えた時、ハッとしたのは「灯台もと暗し」で運営協議会の一人ひとりがりノテラスを自分の中に落とし込んで、自分の言葉として語るほど、まだ私たちは話し合っていないかもしれないという思いです。「なぜ必要なのか?何のために作るのか?」という一番大事な点をちゃんと確認しないまま進めてきてしまったかもしれないと思いました。

リノテラス運営協議会会長からも「今まで行政にいわれるまま進めてきたけれどこれではだめだ、ちゃんと話し合しましょう。」という電話が入りました。会長は大変忙しい人でしたが、この時ばかりは時間をとって二人で話し合いました。その結果「行政の立てた計画をこなしていくような運営協議会のあり方は変えよう。スピードダウンしてまずは運営協議会の中で、理念からとことん話し合っ一つにまとまろう。」と決めました。それが10月下旬ですから11月の運営協議会ですぐに、この間の経緯と今後のことをみんなで話し合うべきだったのですが、そこで行政のスケジュールに邪魔をされます。11月は前々から各団体がリノテラスをどう使いたいのか、どんな場所にしたいかを、プレゼンする「プレゼン大会」と決まっていた。結局進め方への異議申し立ては12月の運営協議会に持ち越されました。



2018年12月

12月16日隣人まつり7。「本当にこれでいいの？」って悩み始めたころ。



子どもたちと話してみたいね。

仮プランのお披露目はしたが… うまくいかないこともある。ああ!

「今の図面に何かしら意見を持ちたいんです。みなさんのお考えを聞かせてください」。隣人まつり実行委員会からリモテラス運営協議会へ組織を立ち上げて約半年過ぎた平成30年12月。設計プランのお披露目をしているその横で、会長山田と副会長広中が声を上げた。メンバーひとり人と面接をして問いかける。「ほんとにこのプランでいいですか？ 公益施設の運営を市民や団体や行政と一緒に考えて、こんな素晴らしい機会をなんとなく他人事みたいに済ませてしまっているのか？ いやいや、いかんでしょ～、せつかなんだから、この場所にもっとたっぷりと愛情込めていきませんか？…」いかなるご縁か、とにかく乗りかかってしまった協議会メンバー。助け合っただけしか前へ進めない。だから、お互いの声をまず聴くことから始めた。この時の問答や向き合った時間が立ち帰る場所になるといい。

イベントするための協議会じゃないですよね。

10年前と今とじゃ、社会事情も変わってない？

リモテラスのためにやっている訳じゃない。他の大学とやるだけでも4つもあって大変なうえに行政とも話して…となるとじっくりやっていかないと出来る訳ない。相互理解しながらやっていこうとすると、本当に時間がかかる。

全体のスケジュールはどうするの？

自分のことやまちのこと、考えることはいっぱいあるよね。

この場所がまちのために、ここに暮らす人々のために役に立てることはなんだろう。



せめて、愛着のある図面にして、そこにいる人々の姿をもっとイメージしたいな。

この場所だからこそできることはあるのかな。

「つながりをデザインする」って、具体的に何をやるの？

時間がない!

ほんとに、市民にとって必要なの？

もっともっと仲間を増やしてもよいのでは？



広中日記④ 本当の市民主体へ一歩踏み出す

12月の運営協議会でようやく、今まで行政が決めたスケジュールに従って進めてきたことに対し、「もう少しだけ、みんなで考える時間をください」と皆さんに投げかけることができました。そして、これからの会議では、行政職員やコンサルに頼ることなく自分たちで一つひとつ納得して進めていきたいということを、運営協議会のメンバーに提案しました。一方でみんなが一つにまとまって進むために「理念」を共有したい、それを考える話し合いから仕切り直しをしたい旨も伝えました。ずっとかかわってきたメンバーからは「また遅れるのか、いい加減にしてほしい。」といった苛立ちの声も聞かれましたが、運営協議会が真の市民主体にならない限りリモテラスはあり得ないという状況になったことで、それでもやはりリモテラスは必要だからみんなで何とかしようという思いでまとめることができました。

この時点で9月の仮プランは一から見直すことになりましたが、行政が立てたスケジュールでは12月の隣人まつり第7弾として、設計プランの市民へのお披露目が予定されていました。現状の進捗状況とのズレに悩みながらも、「隣人まつり第7弾」はそれまでお世話になった外部アドバイザーの最後の仕事として粛々と行なわれました。

涙で前が見えない？ だから、

じっくり話し合ってみる。

「自分のこと」を考えるだけでも大変なのに、「まちのこと」を考えるなんて私たちがすること？何のための行政なのよ…というメンバーもいた。市に呼ばれたから仕方なく…、よそ者だけど…そんなメンバーもいた。それぞれの「気持ち」が向き合う時間は痛みもある。ぶつかりあう痛み、わかり合おうとする痛み。涙が出ちゃう。

2019年 1月～3月

問1. リリモテラス運営協議会の理念

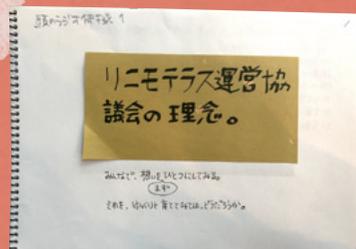
「みんなで、想いをひとつにしてみる。
それを、ゆっくり育ててはどうだろうか？」

そりゃー、世の中いろいろな人がいて、いろいろな考え方があるから、理念といっても「正解」があるわけじゃないけれど。同じ目的をもって、次々に出てくる課題を乗り越えていくための指標のような…。何かあったら、そこへ立ち返ることができるようなそんな言葉。その言葉について、いろいろな世代の人たちがいろいろな立場で話し合えたら、その言葉だって時代と共に育っていくのではないだろうか。

- 理念1 問いかける、向き合う。
- 理念2 森(自然)と共生する



公益施設の運営管理を市民や団体や行政と一緒に考えて、こんな機会って他にないかなあ。せつかくだから、他人事にはしないで考えてみない？



とにかく話し合ってみよう、本音で。…あら、まちや、暮らしのことを考えるって、結局自分に向き合うことだったのかしら…。

新しい年は運営協議会のメンバーへの個別のヒアリングからはじまりました。運営協議会が一丸となってすすめる体制をつくるために、リリモテラスが市民にとってなぜ必要なのかという「理念」を共有し、とことん腹を割って話す機会が必要と考えたからです。通常の会議で論議するとどうしても時間の制約があつて表面的な部分の論議しかできません。運営協議会のメンバーは今までも、市民として主体的に(ボランティア)市の事業(公共)にかかわるときに生じるさまざまなジレンマを抱えながら続けてきました。市民の立場と公の立場は違って当たり前なのですが、微妙な問題なのでなかなかテーブルの上に乗ることはありません。そういったネガティブな部分も含めてじっくりと話し合うことが大切と考えたので、一人ひとりの話を聞き取る時間にしました。

共有すべき「理念」とは何かを考えた時に、遡れば10年前の長久手町第5次総合計画のリリモテラス構想、そのリリモテラス構想のルーツは第4次総合計画にあると言われています。長久手市が町の時代から考えられてきた「まちのにぎわいづくり」の計画ですが、時代や社会状況の変化、諸般の事情とともにその構想も少しずつ変化してきました。まちの将来像として掲げられている「人が輝き、緑があふれる交流都市、長久手」に立ち返ることにしました。

この「人が輝き、緑があふれる交流都市、長久手」というまちの姿に反対する人は誰もいませんでした。リリモテラスが自然との共生や人と人とのつながりが

広中日記⑤ とことん語り合っ
て思いを一致させる

豊かなまちづくりに資するものにしたかったと説明すると、かつての鎮守の森のようなイメージだねと言ったメンバーもいました。

もっと話し込んでいくと、「転入・転出が多い」「5割以上の人が長久手在住10年未満」「自治会の加入率が低い」「まちに対する愛着が薄い」「市民活動が盛んでない」市長曰く「市民同士のつながりが弱い」といった長久手の社会課題の解決に対して、リリモテラスが「どうしても必要」と思う気持ちは皆さん一緒でした。それは隣人まつりを毎月やり続けていた時の「やらされ感」ではなく(最初に行政から招集がかかった時、皆さん感覚的におかしいと感じていたことも話してみて分かりました)心からの願いでした。

学生や外国人、親子連れ、市外の人など、多様な文化や異なる価値観に出会うことがまずは大切で、そこで何かを一緒にやりたい人に出会ってつながることから市民活動が生まれるのではないかと。多世代の交流があつて、智恵や文化が伝承されたり、学んだり人が成長できるような場所が必要なのではないかと。

いろいろ話されるうちに、場所やスペースの広さが問題ではなく、出会いがあつて話し合ったり、相談したりできる機能が必要、だから場所は狭くてもいい。広い場所が必要なら探せばいいというように変化していきました。じっくり話し合うことで通常の会議ではなかなか深まっていかなかった話ができ、一気に距離が縮まりました。



1月14日隣人まつり8
～スズメ交流ファッションSHOW～

それは、とても面倒で、正解がないから、余計にありそうでイライラする…。ことが多い。

少しずつわかりあえてるかな？

問2. 人が輝くってどういう時？

ここにいていいんだって思えた時、うれしいよね。人の役に立った時、うれしいよね。人と関わることが生きること…だから自分の役割や居場所があるってうれしいよね。家族の中でも、友だちの中でも、仕事場でも…どこでもね。そうそう、関わりやつながりを求めるのは人の本能らしいよ。

この場所がまちのために、ここに暮らす人々のためにお役に立てることって何だろう。この場所だからできることってあるのかな。もっと、なかまを増やしたいね。子どもたちとじっくり話してみたいね。

「ありがとう」っていわれると疲れが吹っ飛ぶ、とか「あの人の笑顔を見ると頑張れちゃう」とか。そうだね、向き合う誰かがいてはじめて、自分が見えてくるってある。

問4. 豊かな人のつながりって何だ？

「世代によって、時代によって違うのだろうか。電報、手紙、電話、インターネット、SNS、そしてAI…。つながる手段はどんどん変化していく」

例えば、つながりって「ただ知ってる」ことからもう一歩進んだつながり。挨拶をするだけじゃなくて、お元気？なんて会話をしたり。そこから始まって、そして…。どうすれば豊かなつながりになるのかな。なれ合いではなくて、一人ひとりが自分らしさを伝えあうことで本当の相互扶助が生まれるのではないかしら。得意不得意、強い弱いがありますよね、お互い。支え合うつながりが身近にあることは暮らしの安心安全にもなる。「自立と調和」が「豊かなつながり」のイメージ。これは、「自然に学ぶ」こと、たくさんありそう。…ひとりっきりでいたい時だって、もちろんあるけどね。

問3. どうしたら人は輝ける？

「これはつまり、どうしたら役割と居場所が見い出せるだろう…という問い」

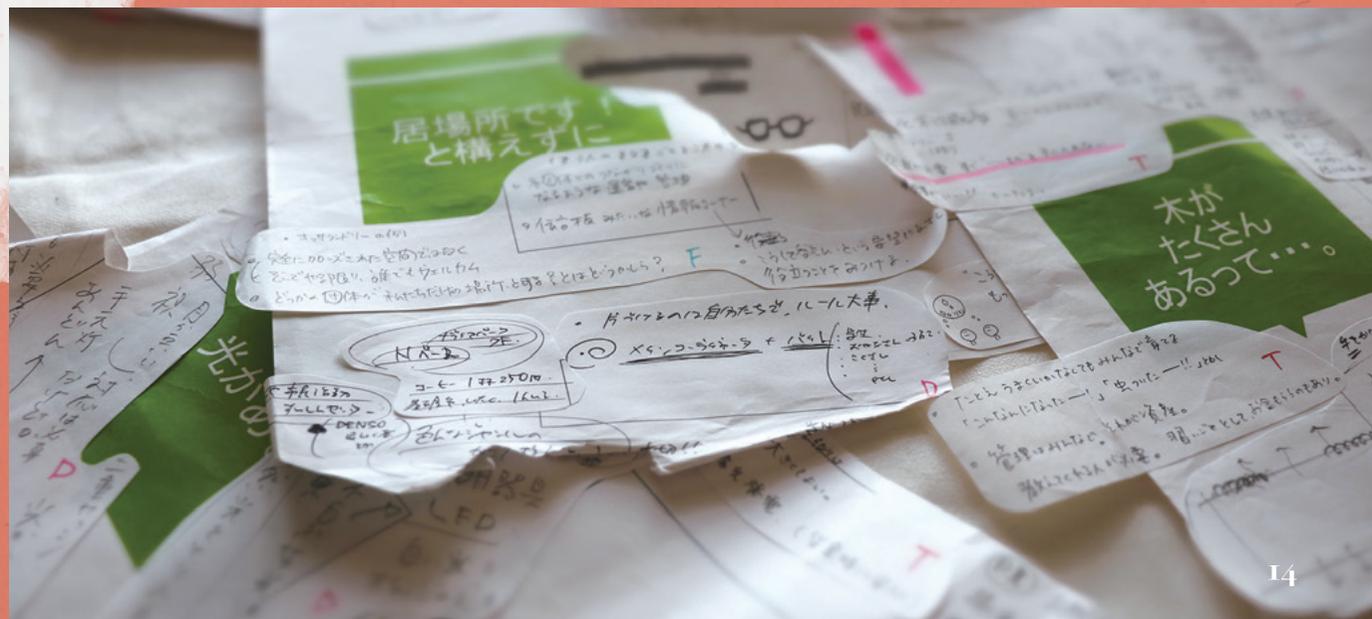
例えば、リモテラス公益施設(仮称)の役割と可能性を考える。ただ、人が集まる場所(=箱)をつくりたいのではなく、ここに来ると色々な人、モノ、コトが何かしら常に話題になっている。ちょっと自分を見つめたり、学びあったりすることで自己変革もしたりする。そしてちょっといい気分になる。隣の人も笑う。いつの間にか、お互い様の関わりができていく。でもでも、それはそれぞれのペースでいい。時が満ちれば、人は誰でも必ず輝く。自分にとっていろいろな出会いがあって「豊かな人のつながりを回復していこう」という空気がやんわりと漂う。そんな人たちが暮らすまちは、きっといいまちなんじゃないかな。

そういえば、ひとりで生きていき方いからって山に囲まれた田舎の集落で自給自足を始めた若夫婦がいっぱい。今頃、どうしているかなあ。

僕は100プロと隣人まつりをまわいで見ているから、100プロと隣人まつりはつながると思う。でも隣人まつりは見え方としては、計画を進めるためのアリバイづくりにしが見えなかった。

「ここに自分たちがいる」そんなイメージを具体的に持てるようにならないと、どんな建物がいいか？といてもまとまらない。いや、やることが決まっていれば、どんな建物でもいいんじゃないの？やることって、具体的に何？

私たちはなかなか自立した活動団体にはなれなかった。思いがあっても継続して活動し続けることは、とても難しいから、やめようかなと思うこともあった。そこにお仕事として市の人のサポートがあったら、何かうまく回る方法ってあるのかもしれないとずっと思っていた。そんな時に100プロの話が…。



問答は続く。凝り固まった頭の柔軟

体操みたいに。

問5. 「つながり」に 答えはあるのか？

「私たちの暮らしはどんどん変わる。変わっていく中で、人と人、人とモノ、人とコト…いろいろなつながりに、つながり方の答えはあるのだろうか。正解！なんてあるのだろうか。」

きつと、ずっと、これからも考えねばならない。何を大切にするのか。どう生きるのか。対話の中で見つけていけたらいいな。自分自身との対話。自分と他人との対話。

「選ぶことができる」ことは幸せだ。「どうしよう」と思い悩む時間が許されることも幸せだ。…と思う人も思わない人もいるんだなあ。

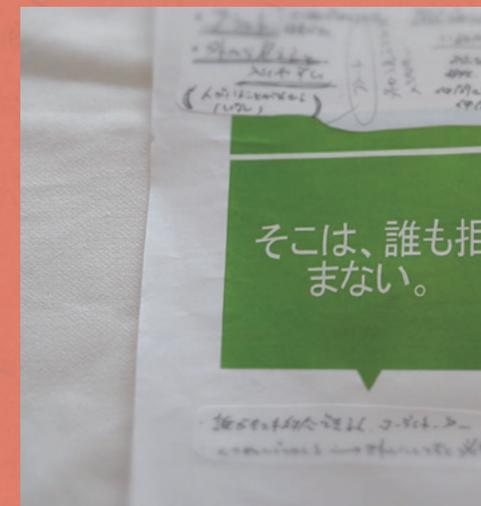
…リコモテラスには、関わる誰しもの“思惑”が交錯しており、誰もそれを本音で話したり、それらを理解してもらおう、または理解しようという相互の働きかけが起きてこない。まずこのメンバーでの『つながり』が無いように感じる。

問8. 「人間性」って何だ？

「リコモテラスに関係あるのか？」

例えば、答えなんかわからないかもしれないが、こんな問いをずっと考え続けることだって大切じゃない？ 子どもも大人もみんな考え続けるといい。ジブリパークが近くに建設される予定だから、ジブリの世界観から学んでもいい。チームもののけとか、チームナウシカとか。人が集う、つながる、育ち合う場所があるっていいかもしれない。

市民から必要という声がないときに運営協議会としてはどうしていくのか？また、市役所職員が協議会から外れても、やはり市役所と観光交流協会の物理的な距離は近く、あまりイメージは変わらない。それは協議会のメンバーに伝わってこない情報があったり、些細なことでも公に協議されないまま進行されてしまうことで、結局他人の敷いたレールを歩かされているように思えてならないからだ。

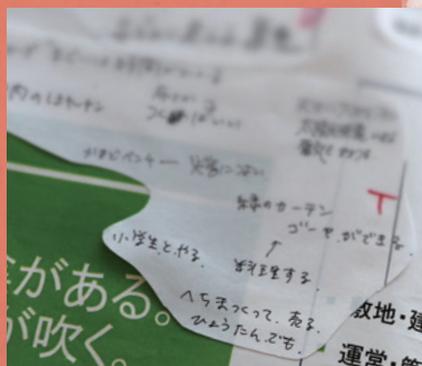


問6. 「つながり」って どうしたら手に入る？

「お金で買える？ ポーッととしてたら誰かが運んでくれる？ どこかにお手本はある？ 欲しいと思ったら、すぐ手に入る？ いらなくなったら、ポイッと捨てられる？ なくても困らないなら、無い方がいい？」

例えば、人としての役割と居場所って、やっぱり、与えられるものではなくて、自分から求めていくことが大切なのかな。自分が主体者にならないと、目的もはっきり持てないし課題も見つからない。「つながり」って、自分が主役。いやいや、ただ「なんとなく」流されるようにしていてもいいよね。「自分らしく」を知ることは難しいし、知ったとしても自分のコトが一番思いどおりにいかないのね、たいいてい。知識で理論武装してもね、感情は別物ってね。「わかっちゃいるけど、やめられない」なんて唄があったな。いずれにしても、お金だけで解決できることではないだろう。

1年間スケジュールが決まっています修正もできないような進め方に驚いた。11月にプレゼンしてそれがどうなったかもない。個人的には、強い思いを持っているとそれだけしんどくなるから感情的に切り離したくなることもあった。



に、人間性？ そんなことまでなんで考えなきゃいけないの？ といいつつ、いろんな問答を互いに吹きかけ合いながら、その人と向き合うチャンネルをどうにかしてあわせようと試みる。

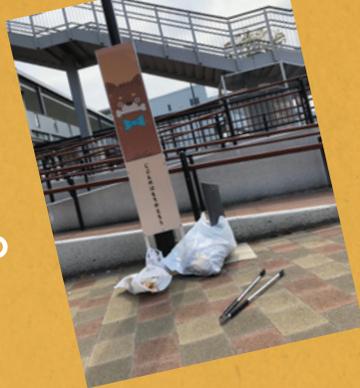
答えはパソコンの中にあって、友達はゲームの中において、情報はSNSで、食事はサプリで。だから、困らない。という生き方もありなのかな。

問7. 「つながり」の お手本ってある？

「ついでに言えば、取扱説明書なんてあるのかな？」

いずれはAIなんかが作ってしまうかもしれないね。マナー集みたいに。そもそも、生きていくのにつながりは必要なのか、から始まるつながりのパターン集。覚えても、伝わらなかつたら意味がないけど。つながるって、循環の始まりだとするならどう？ 自然の循環がお手本になるのかな。おてんとうさまと土、風、水、火…つながって、そこにある。

まだまだやってみている。



始めて見ればいろいろなことが起こる。連絡が途絶えたり、参加できなくなったり、いろいろな事情が降りかかる。協議会の中だってまだまだじっくりいかない。でも、少し違う風が吹き出した。「私は、とにかく、ここに居たいと思う」そんな一人のメンバーの言葉が、きっかけだったように思う。夏の終わりでそろだったかな。

クリーンアップ大作戦



毎月第1土曜日開催



驚いたのは「たばこの吸い殻」の多いこと。きっとポイ捨てするんだろうなあという状態であちこちにある。でも、もっと驚いたのは、焼きかけの生肉とマッチ箱と缶チューハイ。どんな人が何をしようとしたのかなあ。ゴミ拾いから、まちの様子が透けて見える…お話ししたいなあ。そう思ったから、続けていきたい。だから、どうやって続けるかまた考える。



問9. 公共、公益って何だ？

「リリモテラス公益施設(仮称)という名前に背負った「公益」って何だ？
公共施設、公共空間って何だ？」

疑問がいっぱい。公益に資するって、何をしたらそうなるの？税金ですべて賄うの？ 運営するお金も？ そこで働く人の賃金は？ 電気代、ガス代は？ 地域にある公民館や集会所や共生ステーション、まちづくりセンターはどうなっているのだろう。運営を工夫して、収益をあげる？ ふらりと寄る場所とお金を払う場所と区別できる？ 法律はどうなってる？一つ一つ、答えを求めて考える。他所の事例を学ぶ。行政のメンバーも他市町の事例を調べたり、協議会メンバーは収益の仕組みを考えたり、ボランティアの可能性を探ったり。まだまだ、答えは見つからない。もっといっぱいみんなで話し続けていこう。この場所の「何か」を求めて、長久手で暮らす人が喜んだり、長久手に訪れる人が増えたりするといい。こうやって悩んでいる「答えの途中」が新たな仲間を呼び込んでくれる予感…も。

新年の話し合い以降、運営協議会は月に2回のペースで話し合っています。4月からは今まで団体を代表して参加していた方々にも、あて職としてではなく主体をもって参加できるかどうかを確認した新体制で臨んでいます。行政からは担当者が1人だけ参加し、運営協議会の事務局と連絡を取りながら協議会を支えてもらっています。主には行政的な手続きや行政的なスケジュールの管理です。仕事の内容としては、昨年と大きく違う訳ではありませんが、昨年と大きく違う点は、今私たち側に、「こうしたい」という明確な主体が生まれたことで市民の側にあった「おまかせ感」もなくなってともに進めていく協働に近づきつつあると感じています。今までコンサルに任せていた専門的なアドバイザー機能は、必要なタイミングで必要な人材に、運営協議会が負担金から委託してアドバイスを仰ぐという形になりました。

市民が主体をもって、官と民が対等な立場に立つ

広中日記⑥

を進めていくことは、今回の体験から非常に難しいことだと感じています。同時にとても重要なことでもあります。

行政は公共のために広くあまねく平等が原則で、それを仕事としてやるのですが、市民は仕事ではないので、自分のしたいことをしたいようにするものです。そもそもの出発点が全く違うので協働が難しいのは当たり前です。リリモテラス運営協議会が最初そうだったように、協働とは形だけで市民が「やらされている」か、行政が「やらされている」かになりがちです。対等な関係を進めることは本当に難しいのです。両者が対等な関係お互いを尊重し、同じような主体性を持って協働するためには、何のためにやるのかという目的の共有が絶対に欠かせません。その目的の実現に向けてともに頑張ろうという思いがないと、市民は動きません。市民は仕事ではないので心が動かない限り身体は動かないものだと思います。

市民主体で進めていくにあたっての公民協働のあり方



そして、けっこう おおぜいが 楽しめているんじゃない？

10月5日、「人生フルーツ」上映会&芋煮会。おおぜいの市民が参加してくれたことがとても嬉しかった。そして、寄せ集めの運営協議会に、明らかな変化がみられるようになったのもこの時期からだ。もう、だれも自分たちの団体や活動のための場所だけのことを主張しなくなっていた。上映会の参加者を募るため、手分けして、手配りして人を呼び込む。このアナログ的な口コミ戦術は、メンバー同士のつながりも強くなったのではなかろうか。できることをできる範囲で関わる。メールがダメならファクシミリ。みんな、とても良い笑顔だった。

2019年
10月5日

「人生フルーツ」上映会 & 芋煮会



↑手描きの旗。活動しているときはこの旗でお知らせ。
→イオンモール長久手のイオンシネマにて上映会を開催。受け付けたスタッフに「来たよー」と声が飛ぶ。



問10.どんなまちで暮らしたい？

「リニモテラス公益施設(仮称)があったら、まちのために良いこと、増えるかな？」

例えば、生きてるって楽しいなって、ちょっと思えたり。誰かが喜んでくれることがちょっと嬉しかったり。多種多様、すなわちごちゃまぜの価値観が会ってつながることで「ちょっと」が積み重なったら、このまちはとても味わい深いものにならないだろうか。悲しみや苦しみも「ちょっと」ずつ、隠したり投げ出したり。そんな人の想いが積み重なったら、新たな公益の役割も見えてくるかもしれない。雑な言い方かもしれないが、おもしろい人に出会うことで、人としての価値観が様々に花開いて、おもしろいひとが増殖する…とか、いろいろな人と出会う体験によって、便利さに慣れて衰えた五感を呼び覚ましセンスよく磨かれる…とか。このまちで、暮らすのが楽しいという人が増えたら、どんな時代になってもこのまちを大切にしてくれるんじゃないかな。そして、「自分たちのまちのことは、自分たちで考えてみよう」って話してくれていたら…。ちょっと嬉しくない？

「私たち、ここに、こんな場所があったらいいなと思っているのですが、ご存じですか?」、「ご意見かせていただけませんか?」、「月1回お掃除しているので、ご一緒にいかがですか?」。スタッフが声を掛けて回る。

それでも、まだやってみる…。

10月25日。リモテラス運営協議会が「平面プランへの再提案」をまとめて提出した。

1 平屋であること

- 目が行き届く、顔が見える
- 市民、素人の力で建築に関われる、修理できる可能性
- 床面積約400㎡ぐらい
- 屋外との連続した関係性を保ちやすい(縁側・土間の利用)

2 木造であること

人工物ではない自然のものを使用する
自然のものは…

- 不便かもしれないが「人間らしさ」や「考えること」や「工夫すること」をセンス良く磨くことを学ぶ機会をくれる。また、その仲間を与えてくれる。
- 「壊れる、腐る」ことから「生命」を学ぶ機会をくれる。また、感動する心、感謝する心を与えてくれる。
- 「暮らし方＝生き方＝死に方」を学ぶ機会をくれる。また、どんなふうでも大丈夫という元気と癒しを与えてくれる。

3 シンボルツリー、樹木、雑草、土、畑があること

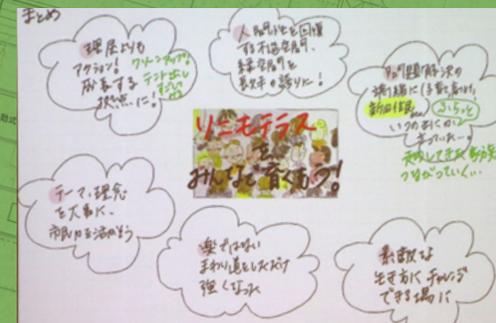
→自然の営みを体験することができる
「風が吹けば、枯れ葉が落ちる。枯れ葉が落ちれば、土が肥える。土が肥えれば、果実が実る。こつこつ、ゆっくり。人生、フルーツ」…人も、暮らしもきつと同じ。

- 循環を学び体験することで「暮らし方の提案」ができる。

例えば、「ここは、ゴミを出さない施設です」から始める。リデュース・リユース・リサイクル。人もモノもコトも。

リモテラス公益施設（仮称）

お披露目 & 長久手パンマツリ（11月24日・長久手市文化の家）



昨年12月運営協議会が行政のスピードについて行けなくなった時、職員の一部から「市の総合計画でやると決まっていることがなんで進んでいかないのだ」という声も聞きましたし、一部の議員からは「無駄遣いだからいけない」という意見も聞きました。

両者とも税金からお給料をもらって市民のために働いている人たちですから、いろいろ市民のために考えているはずですが、市民のために建てるのか、市民のために建てないのか？悩ましい限りです。市長も「市民にとって本当に必要なものなら建てればよい」と言っています。

私も最初は「総合計画で決まっているから建てる」という論理に唖然として、そんな理由で建てるなら要らないと思いました。たいした理由もなくハコモノを建てても、活用する人がいなかったら、税金の無駄遣いだと思うので、議員のいうことも分かります。

広中日記⑦ おわりに

しかし、副市長から「長久手は区画整理で成功したが、人のつながりのないまちになってしまった。市民活動も盛んではない。リモテラスを市民がつながって市民活動が生まれてくるような場にしたい」という思いを聞いて、その考えには深く共感しました。

運営協議会の主なメンバーは、長久手市を特徴づける4つの分野で活動している団体で構成されています。そもそもリモテラスがなくても自分たちの人的資源やスキルを使って市民のためにやりたいことをしてきたボランティアの経験豊かな人たちです。市民側の目的にもともと高い公益性があったので、その目的が行政と一致できた時から協働の歯車が動き出したと感じています。私たち運営協議会のメンバーも市民ですから、無駄遣いといわれるような大きな建物をつくるつもりはありません。むしろ建物よりもそこでどんな活動ができるのかが大切と考えています。リモテラスが建つことがゴールではなく、スタートだと考えています。リモテラスが長久手市のかかえる社会課題を市民の力で解決していく拠点となるように、これからも市民との対話を重ねていきたいと思っています。

文責 リモテラス運営協議会副会長 広中省子

リニモテラス公益施設(仮称)建設予定地



発行 リニモテラス運営協議会
制作・編集 一般社団法人長久手市観光交流協会

連絡先 リニモテラス運営協議会事務局 TEL 0561-62-6770